「ＲＹＬＡの伝統」ＲＹＬＡ３５周年記念講演　余島　　25.5.26

今日は、このＲＹＬＡ創立３５周年記念として「ＲＹＬＡの伝統」というテーマで些か感想を申し述べたいと思います。先ず、俳句を一句紹介します。

去年今年貫く棒の如きもの　　高浜虚子

この句は、去年から今年にかけて年が改まったが、世の中には何ら変わることもなく厳然と続いている棒の如きものがある、という意味であります。その棒の如きものが一体何を意味するのかについては、作者は一切触れることなく、読者の解釈に任せているのであります。私は、この句を見て直感的に思い出したことは、物事の**「伝統」**ということでありました。

このＲＹＬＡも今年で３５年の歳月を閲して、一つの伝統と謂うべきものが生まれていると思うのであります。その伝統のプロローグは、１９７８年に始まります。そこで、今から３５年前の遠い昔の記憶でありながら、昨日のことのように鮮烈に記憶していることから話に入っていきたいと思うのであります。

先ず、１９７８年９月２日、神戸元町のフランス料理店ブラン・ドゥ・ブランでＲＩ第２６８地区の社会奉仕委員会（委員長湊謙一）と青少年奉仕委員会（委員長深川純一）の合同委員会が開かれました。その合同委員会に、当時、地区の世界社会奉仕委員長の今井鎮雄先生が来られて、ロータリーにＲＹＬＡというプログラムがあるが、この地区でもやってみないかと提案されました。私達は、この時初めて RYLA という言葉を聞きました。したがって、ＲＹＬＡとは一体何ぞやということで皆非常に懐疑的でありまして、大方の意見は、このような地区主導型のプログラムは、直ちに賛成し難い、という意見が大勢を占めていました。

しかし、今井先生一流の説得力をもって、兎に角、ＲＹＬＡが出来るかどうか一度検討してみてはどうか、ということになったのであります。

そこで、１０月３０日、再びブラン・ドゥ・ブランで地区青少年奉仕委員会が開かれ、**ＲＹＬＡ特別委員会**を発足させることになりました。委員は、今井鎮雄（神戸西ＲＣ）、高木正徳（神戸垂水ＲＣ）、山村徳太郎（西宮ＲＣ）、田中健一郎（神戸ＲＣ）、深川純一（伊丹ＲＣ）の５名が選任せられました。

そして１２月６日、神戸ＹＭＣＡにおいて**第１回ＲＹＬＡ特別委員会**が開催され、５名の委員が全員出席して、約３ヶ月後にＲＹＬＡセミナーを小豆島の余島で開催することを決定しました。９月２日に始めてＲＹＬＡの話が出てから僅かに３ヶ月しか経っていませんでした。

そこで、地区内各ロータリークラブに対するＲＹＬＡとは何かという情報提供については、２月１１日の西山記念館における神戸分区のＩＣＧＦ（現在のＩＭ）を利用して、その開催直前に地区青少年奉仕委員長会議を急遽招集してＲＹＬＡの受講生募集その他の情報を提供することを決めたのであります。

そして１２月２３日　神戸ＹＭＣＡにおいて**第２回ＲＹＬＡ特別委員会**が開催

され、今井、山村、高木、田中、深川の全委員が出席し、この会議で今井先生からＲＹＬＡの基本構想が披露され、意見交換の結果、実施計画が決定されました。それは、現在のＲＹＬＡとほぼ同じ構想のものでありました。

年が明けて１９７９年１月１日、元旦早々、今井先生より速達便が飛び込み、**第３回ＲＹＬＡ特別委員会**の開催を急ぐべきこと、その他ＲＹＬＡ実施に向けての指示がありました。

そして１月９日、神戸ＹＭＣＡにおいて**第３回ＲＹＬＡ特別委員会**が開催され、出席者は、今井、高木、深川の３名でありました。

この会議では、各クラブに対する情報提供・説得の方法、受講生を集める方法を決め、セミナーの講師の選定は今井先生に一任することを決めたのであります。

そして２月１１日、神戸の西山記念館において、神戸分区のＩＣＧＦ（都市連合フォーラム・今のＩＭ）の直前に分区代理・地区青少年奉仕委員長合同会議を開催し、今井先生がＲＹＬＡの企画、立案、実施の計画を説明され、受講生の推薦を依頼されたのであります。したがって、各クラブがＲＹＬＡというものを初めて知ったのはこの時でありました。実に、**３月末のＲＹＬＡ実施日迄わずか１か月半**を残すのみという差し迫った時期でありました。

そこで先ず、急がなければならない**受講生の募集**については、各クラブに**受講生推薦を依頼**する一方、今井先生が**兵庫県県民局**を通じても働きかけて下さいました。

そして２月１８日、淡路分区のＩＣＧＦにおいて更にＲＹＬＡ実施の情報提供、３月７日、ＲＹＬＡ委員が余島を実地に見聞しておこうというので、ＲＹＬＡ特別委員で余島を見学しました。私は、この時初めて余島を見たのであります。

何はともあれ、このようにして、同年３月２８日から第１回ＲＹＬＡの開催に漕ぎ着けたのでありますが、当時は、５人の特別委員会があるだけで今日のような実行委員会は未だありませんでしたから、今井先生が企画立案されたものを具体的に実行するための事務一切は、神戸西クラブの京極美栄子さんが一人で取り仕切って下さいました。京極さんは、受講生推薦依頼のための各クラブへの連絡、案内状やワークブックやワッペンの作成、四国の２６７地区への連絡、余島との連絡、部屋割りに至るまで本当に大変なことであったと思うのであります。心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

さて、このようにして始まったＲＹＬＡでありましたが、このＲＹＬＡの伝統ということを考えるときに、私達は、このＲＹＬＡを始めるに当たって作られた今井先生の基本構想を避けて通ることは出来ません。先生の基本構想は、ＲＹＬＡの中核にあるものとして脈々と後世に伝えられるべきものと思うのであります。したがって、先生の考え方がどのようなものであり、それがどのように継承

されて行くのかということを明らかにしておきたいと思うのであります。将に、このＲＹＬＡは、今井先生の基本構想によって創り出されたものなのであります。

と申しますのは、元来、ＲＹＬＡというものは、オーストラリアで始まり、アメリカのワシントン州タコマで開催されたことを契機として一挙に草原の野火の如く全米に拡がっていったのでありまして、これがオリジナルなＲＹＬＡであります。

ところが、このオリジナルなものは、高校生年齢の若者達を対象としているものでありましたので、今井先生は、日本の実情には合わないと考えられて、このオリジナルなＲＹＬＡを日本の実情に合わせてアレンジされたのであります。

したがって、このＲＹＬＡの中核にあるのは今井先生の基本構想なのであります。私は、今井先生に導かれるままに今日に至っているのでありますが、３５年の体験を顧みながら今井先生の思考の軌跡を眺めてみたいと思うのであります。

さてそこで先ず、今井先生の基本構想の根底に流れる考え方は一体何か。言葉を換えれば、今井先生がこのＲＹＬＡで一番大事に考えておられたことは何か。

それは受講生の自律であります。今井先生は、第１回のＲＹＬＡのプログラムを企画・立案されるときに受講生の自律を前提として企画・立案されているのであります。ということは、青少年のリーダーである受講生を先ず全面的に信用していることを意味します。

そこで、これは大事なことでありますので、少し復習しておきたいと思うのであります。

先ず、このＲＹＬＡは、既に色々なグループでリーダーシップをとって活躍しているリーダー達に、更に高い境地に立つリーダーになっていただくために企画されたものであります。謂わば、リーダーのリーダーを育てるところなのであります。

したがって、受講生は、既に立派なリーダーでありますから一切のプログラムについて最低限の規則しか決めていません。例えば、煙草の火の始末だけは注意して、それ以外の余計なことは一切干渉していません。掃除の道具はここにあるとかゴミを捨てないで下さい、などと謂うことは一切言わないことにして、全て受講生の自律に委ねる、これが今井先生のこのＲＹＬＡについての基本的な考え方であります。

このことは、ある意味では不親切なことかも知れませんが、今井先生は、そのことに或る種の効果を期待されたのであります。そのことについては、「暇がありすぎる」とか「もう少し規律正しくやってくれたらいいのではないか」とか色々と言う人があるかも知れません。

しかし、例えば少年少女キャンプの場合は、そのように規律を喧しく言います

が、ＲＹＬＡは、皆立派なリーダーでありますから一切自由にしました。完全な自律であります。したがって、朝の挨拶だけすれば、後のことは自由、顔を洗うも洗わないも自由、食事は食べたくなければ食べなくても良い、講義の時間まで寝ていてもよい。全く自由であります。

要するに、今井先生は、受講生に一切を任せられたのであります。その意味において、受講生は戸惑いを感じたと思います。しかし、受講生がこのことに応えて立派なセミナーが出来たことに感謝しておられました。殊に、カウンセラーの皆さんがこのやり方に見事にアジャストされていました。

また、このことに関連して、受講生がリーダーとして子供を育てるということは、単なる指導の技術の問題ではなくて、もっと深い精神的な意味を持ちながら技術を使わなければならないことを意味します。したがって、今井先生は、このＲＹＬＡでは、プログラムについての細かい**リソース**を提供されませんでした。例えば、ＲＹＬＡ２日目の**レクリエーションタイム**。

今井先生の願いの中には、午後一杯の自由な時間に、受講生達に何が出来たかということを知りたかったということ、何をするべきかを考えて欲しかったということがありました。例えば、雨が降ったために、２時間、３時間と全く自由な時間を与えられて、ポカンとして何もすることが出来なかったというのであれば、何時も言われた通りのことしかしていなかったことになり、リーダー失格であります。あのレクリエーションタイムに受講生が、人間として何を自分の問題として考えるか、ということを学ぶだろうと謂うことを今井先生は期待されたわけであります。このようにして、このレクリエーションタイムは、このＲＹＬＡの伝統の一つとして今日に受け継がれているのであります。

また、**キャンプファイヤー**についても今井先生は、最初の Dean として、普通のキャンプファイヤーでなく、このＲＹＬＡだからこそ焚くべきキャンプファイヤーを皆さんに披露されました。それは、一般のキャンプファイヤーでなく、山の上のカウンスルリングで焚いた儀式のファイヤーであります。これは単に感性的な楽しさだけのために焚く一般のボンファイヤーではなく、楽しさの中にも自らを高めるという精神的なものを求めるのがカウンシルファイヤーなのであります。したがって、この**カウンシルファイアー**もこのＲＹＬＡ**の伝統**として今日に至っているのであります。

要するに、**レクリエーションタイム**にせよ、**キャンプファイアー**にせよ、単に感性的に楽しむだけではなく、楽しみの中にも自らの心を高めるという精神的なものが期待されているのであります。

このことは、ロータリーについても同じことが謂えます。ロータリアンが酒を飲んだり、ゴルフを楽しむという感性的な楽しみを求めることも親睦を醸成するためには大事なことではありますが、しかし、酒を飲む時もゴルフをする時も、

何をするにつけても、何時も他人から何かを学ぶ心を持ち、自らを高めるという精神的なものを求めることが大切なのであります。ロータリーは、この心の状態を感性的親睦に対して精神的親睦と謂っているのであります。

そこで、私達がこのＲＹＬＡの伝統を考える時に、心に留めておくべきことが二つあります。

一つは、**空間的には広い目でものを観ること、即ち、世界的な視野をもつこと。**

一つは、時間的には永い目でものを観ること、即ち、過去、現在、未来に亘って歴史的な視野を持つこと、であります。

そして、何れの場合にも、目に見える現象に惑わされずに**物事の本質を見抜く躾をもつ**ことが大切であります。そのためには、先ず過去を顧みて人間の思想の歴史に学ぶべきでであります。これが今日の話の底流に一貫して流れる**裏のテーマ**であります。

さて、これだけのことを申し上げておいて、このＲＹＬＡの具体的な基本構想の話に入ります。

ところで、このＲＹＬＡの基本構想として**伝統的に受け継がれているもの**は、大別して三つの柱から成り立っていると考えられるのであります。

第１は、レベルの高い講義であります。

第２は、受講生の徹底的なディスカッションであります。

第３は、カウンセラーシステムであります。

この基本構想の根底に一貫して流れているものは何か。それは、先ほど申し上げました**世界的な視野をもった青少年リーダー**を育てようということであります。

この点については、第１回のＲＹＬＡにおいて、いみじくも今井先生が**「社会の動きと青少年の実態」**というテーマで講義をされています。

実は、この時の講義は、関西学院の心理学教授の田中国夫先生の予定でありましが、田中先生の恩師がお亡くなりになったため、急遽、今井先生がピンチヒッターを務められることになったのであります。今井先生はその講義の初めに**「羊頭（ようとう）を掲げて狗肉（くにく）を売る」**ようなことになって誠に申し訳ないと言っておられましたが、狗肉を売るなどというものではなく、真に素晴らしい講義でありました。私は、その講義に強烈なインパクトを受けたわけでありまして、その時に教わったことをその後も時々引用させて頂いております。今井先生の講義は、将に**「羊頭を掲げて羊頭を売る」**ものでありました。

先生は、その時の講義の冒頭において、今の時代に私達がどのように生きるかを考えながら、大きな視点から青少年の理解の仕方を考えて行きたい、として、

二つのことを指摘されました。

第１は、**世界が激しく変動しているという事実**であり、第２は、**教育問題が大きく変わりつつあるという事実**であります。いずれも、先ほど申し上げました**世界的な視野と歴史的な視野**を養うための話でありました。

先ず、**第１の激動する世界の問題**については、第２次世界大戦後の１９４５年から１９７８年に至るまでの状況を簡潔に集約されました。実は、このＲＹＬＡが始まったのが将(まさ)に１９７８年でありますから、先生は真に時宜にかなった問題を受講生に解りやすく解説して下さったわけであります。即ち、

アメリカがヴェトナム戦争で信頼を失い、ソヴィエトがチェコ侵略で信頼を失ったとき、第３世界からの発言が自然に強くなり、その結果、国際関係を形成していく主体は、最早、国家ではなく、民衆（人間）であると考えられるようになったということ、そして、経済の世界でも、**One world problem 一つの世界の問題**という考え方が世界中の人々の中に浸透して来たのであります。これは、世界の問題を考えるとき、一人一人の人間を大切に考えていかなければ、世界のことも考えられない、という考え方であると先生は集約されています。

この激動する世界の問題については、先生は**第２回ＲＹＬＡ**においても受講生に解りやすく解説しておられます。

先生の解説を簡単に紹介致しますと、第２次世界大戦後は、**ＧＡＴＴ体制**というものによってアメリカを中心とした先進工業国が世界の責任を持っている社会でありましたが、**１９７０年以降**、アメリカとソヴィエトのイニシアティヴが失われ、**第３世界**からの発言力が自然に強くなり、従来のようにアメリカを始め特定の国々だけが利益を得るのではなく、第３世界の国々も同様に経済的なシェアーを受けなければならないという宣言をして、世界もこれに同調しなければならない動きになって行ったのであります。。

そこで、**１９７３年**、アルジェリアで**非同盟諸国首脳者会議**が開かれ、二つの宣言がありました。何故アルジェリアなのか、と言うと、アラブ諸国の中で独立を勝ち取るために最も血を流したのがアルジェリアであり、アルジェリアはアジアにおけるヴェトナムのような存在であったのであります。したがって、この宣言が今日のイスラム問題の端緒となったと謂えるのであります。

第１は、**政治宣言**であります。これは、世界の平和が超大国の取引の中にあるのではなく、平和を願った国々が勝ち取ったものこそ本当の世界の平和であるということを宣言したのであります。これは、やがて**１９７５年**、ヴェトナム戦争として現れました。

第２は、**経済宣言**であります。これは、自分の国から出る石油資源は自分の国のものであるから、その値段は自分で付けるという宣言であります。このことから世界の経済秩序が変わったことは周知の事実であります。**１９７４年**には日本

も最初の石油ショックをうけました。

以上のような、**１９７３年以降**の世界の激動の中で、一方では、先程申し上げた **One world problem** 即ち、**一つの世界の問題**という考え方が世界中に浸透して行きました。

これは、**人口、食料、公害、平和**等の問題は、自分の国だけの問題ではなく、**全世界の問題**である、というのであります。

そこで、このような**一つの世界の問題**を解決しようという主張が第３世界から起こってきました。したがって、昔は、力で抑えることの出来た国連の舞台では、大変大きな問題であったわけであります。

このような、世界の動きの中で、国際社会を動かす主体は、従来は、国家や多国籍企業（経済の重要な媒体）でありました。ところが、その後、そのほかに、民衆（個人の集合体）乃至**ＮＧＯ（Nongovernment Organization）**が大きな役割を果たすことになってきたと先生は解説されています。

なお、この問題については、先生が受講生に紹介された**セルヴァン・シュレベールの著書「世界の挑戦」（ＮＨＫ特派員磯村尚徳訳）**に詳しく解説されています。序でながら申し上げますと、先生は、毎回の講義の時に受講生のために色々な本を紹介して下さいます。私は、ＲＹＬＡのあと必ずその本を買ってきて読むのでありますが、自分の視野を広げるのに大変勉強になりました。

実は、ＲＹＬＡというのは、本来、受講生の教育ためのものでありますが、ＲＹＬＡの講義はロータリアンのためにも非常に勉強になります。ロータリアンが自分の専門以外の勉強をするには格好の機会であると思うのであります。

また、先生の講義は、ＲＹＬＡ第１回のピンチピンチヒッターに続いて第２回も真に印象深い話でありましたが、第１３回のＲＹＬＡ以後昨年の第３４回までは、毎回の最終講義で他の二人の先生の講義を引用しながら受講生に解りやすく総括して下さいました。実は、このことも既に**ＲＹＬＡの伝統の一角にあるもの**となっていると思うのであります。ただ、この伝統を受け継いで更に新たな伝統を創り出していくのは若い人達の責務であることを忘れてはなりません。

次ぎに、**第２の教育の問題**については、先生は **Paul Tillich** という**神学者**の学説を引用され、教育には三つの分野があると説かれました。即ち、

第１は、**Technical Education** 技術教育

第２は、**Humanistic Education** 人間がお互いに心豊かになろうという教育即ち、人道主義的教育とでもいうべきもの。

第３は、**Inductive Education** 人間とは何かという真実に招き入れる教育。

であります。

今井先生は、戦後は第１の **Technical Education 技術教育**ばかりが先行したため、

人間として大切なものは何か、ということではなく、人間にはどれだけの能力があるかを計る**試験第一主義の教育**が横行していると言ってよい。しかし、世界的な視野に立ってみると世界の状況が人間個人に中心をおいて一人一人の人間の問題を考えなければならない状況となってきている。したがって、技術教育というものからもっと人間を大事にする教育、所謂教育革命が世界中に深く潜行してきたと説かれたのであります。

要するに、昔、ソ連が人工衛星スプートニクを打ち上げて宇宙開発でアメリカに先手を打ったとき、アメリカは慌てて**技術教育を奨励**しました。そして、日本も同じように、**技術教育一辺倒**になって**世界第２の経済大国**を築き上げたのでありますが、しかし、その結果、第２の **Humanistic Education** 、第３の **Inductive Education** の教育の分野が欠落してしまったのであります。

実は、私が **Inductive Education** という言葉を最初に耳にしたのは、この今井先生のＲＹＬＡの講義でありました。しかし、当初は、この **Inductive Education** という言葉が具体的には何を意味するのかということがよく解りませんでした。**Inductive Education**、それは人間とは何かという真実に招き入れる教育のことである、とは謂うのでありますが、それは**具体的には一体どういうことなのか。**

私なりの一応の解釈を申し上げますと、例えば、科学技術の発達によって医学は大変進歩しました。人間の幸せのためには大変有り難いことであります。しかし、医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされています。このことに思いを馳せる人は、非常に少ないのであります。**このことを一体どう考えるのか。**

人間の幸せのためであれば、モルモットや実験動物の命を奪ってもよいと考えるのか。しかし、彼らも神様から与えられた命を懸命に生きているのであります。**その命を奪うことは罪ではないのか。**もし、罪だとすれば、**その罪は、一体、誰が、何時、何処でどのようにして償うのか。**

元来、私達人間は、動物の命、植物の命など生きとし生けるものの命を頂いて生きています。この生きとし生けるものの命を奪って生きていく**人間とは一体何か。**そもそも**生きとし生けるものの命とは何か。**

このようなことを青少年に問いかけていく教育の分野が、現在の教育体系の中に欠落しているのであります。

実は、このようなことを青少年に考えさせる教育もまた **Inductive Education** と謂えるのであります。即ち、人間とは何か、生きとし生けるものの命とは何か、という真実に招き入れる教育、将に **Inductive な教育**なのであります。

青少年に、このような課題を与えて、彼らが成長していく過程において、一生涯の課題として解決して行かせる教育、謂わば、人間とは何かという真実に招き

入れる教育もまた**Inductive Education**と謂うのであります。

私は、この **Inductive Education** という言葉に強い感銘を受けましたので、その後、私の恩師の先生にこのことについて聞いてみました。

恩師の先生は、小学校の理科の時間に、人間が実験動物の命を奪っていることを担任の先生がポロポロと涙を流しながら話されたそうであります。

恩師の先生は、子供でありましたから、その時どうすればよいか判らなかったそうでありますが、子供の時に問いかけられたその問題に非常に強い感銘を受けられました。

そして、その後、大人になって後も、その問題が心にあったそうでありますが、やがて、宗教の世界、禅宗に帰依するようになって、その問題を自ら解決した、と言っておられました。

このように、子供に一つの課題を与えて、それをその子に一生涯の課題として考えさせ、解決させていく教育、このようにして、人間とは何かという真実に招き入れる教育のこともまた **Inductive Education** と謂うのであります。

これは、**優れて倫理的な教育**であります。したがって、**Inductive Education** の世界は、まさに**倫理の世界**の問題であります。そうだとすれば、これは**倫理運動**である**ロータリーの問題**でもあります。そして、大切なことは、ロータリアンがこの**倫理の問題**を青少年並びにＲＹＬＡの受講生に問いかける場合に、先ず、ロータリアン自身がこの問題に取り組まなければ、人を育てることは出来なかろうということであります。

ただ、この命の問題については、日本人というのは本当に心の優しい民族だなと思うことがあります。それは、日本には、古来、動物の命を奪うことについて供養という考え方があります。猪(しし)供養、鮎供養などであります。猪や鹿を獲ることによって、即ち、その命を頂いて生活している山の猟師は、猪供養をして猪達の霊を弔っています。また、川や海の漁師は、鮎供養、鰯供養などをしています。これは、自然に対して謙虚であることの一つの証しでもあろうかと思うのであります。因みに、アメリカやヨーロッパの人達には、このような供養の思想は無いように思うのであります。

要するに、**人間**は、自分が生きるために動物の命を奪っています。そのことを当然のことと考えるのは、詰まるところ、**人間中心のものの考え方**であります。動物の命を奪っていることを厳然たる事実として、人間とは何か、命とは何かを考える教育もまた **Inductive Education の分野**であろうかと思うのであります。

要するに、**技術教育**だけではなく、このような **Inductive** な教育によって、初めて**人は育つ**のであります。**技術教育だけでは人は育たない**のであります。

或る時、今井先生がＲＹＬＡで**説かれた事例**を紹介しておきます。例えば、**筋ジストロフィー**の少年が、あと２年しか生きられないと知って、その２年間で何

を勉強したらよいか、と教育専門家の先生に尋ねたところ、その先生は答えることが出来なかったそうであります。**『私達の教育は間違っていたのではないか』**と述懐されたそうであります。

また、**癌患者**が、あと１年の命を勉強したいと言った時、現在の教育体系の中で何を勉強せよと言えるのでしょうか。全てがあまりに**技術的**であり、**手段的**であるために、１年で死んでしまったら意味がなくなるのであります。１年しかない命で学ぶものがないのか。これに答える教育もまた **Inductive Education** と呼ばれるものであろうと思うのであります。

私は、**ＲＹＬＡの伝統**というものを考えるとき、この **Inductive Education** もまた、**ＲＹＬＡの伝統の一角にあるもの**と思うのであります。

次ぎに、このＲＹＬＡの伝統として特筆すべきものに**カウンセラーシステム**があります。通常の指導者講習会では、受講者にリーダーをつけますが、このＲＹＬＡでは、受講生にリーダーをつけるのではなくて、カウンセラーを付けるのであります。

では、カウンセラーと謂うのは何か、というと、受講生達が抱えている悩みや問題を聞いてあげて、カウンセリングが出来る人達のことであります。

そして、カウンセラーには、ロータリアンとロータリアンの奥様になっていただく。何故このことが大事なのかと謂いますと、ただ単に、レベルの高い講義を色々な先生達にしてもらっても、**何故ロータリーがこの RYLA を企画して、そのようなレベルの高い講義を聴かせるのか、何故ロータリーが RYLA をしなければならないのか、**ということについては、ロータリアン自らが答えなければなりません。したがって、そのカウンセラーはロータリアン自らがやっていただくというのが今井先生の基本的な考え方なのであります。

したがって、受講生は、**一方**では**レベルの高い講義を聴く**。そして**他方**では、ロータリアン及びロータリアン夫人の人格を通して**ロータリーとは何か**ということを感じ取ることになる。これが大事なところでありまして、ただ講義を聴くだけではなく、これが本当のリーダーの在り方である、ということがカウンセラーの人格を通して受講生に判っていただく。そのためには、その見本としてのロータリアン及びロータリアン夫人に受講生の中に入っていただいて寝食を共にして指導して頂くということが必要になるのであります。

要するに、ロータリーが持っているイメージ、とか、理想というものを受講生達が理解し、受講生達もまたロータリーが作ろうとするところの世界の平和その他のロータリーの理想を一緒に担ってもらえるようなことになれば一番よいのではないか、というのが今井先生の願いでありました。したがって、ロータリーのことについては、是非、ロータリアンが自らが答えてもらいたいのであります。

このように考えますと、カウンセラーというのは、なかなか難しいのでありま

すが、しかし、或る意味では、カウンセラーは、このような姿勢で物事を考え、このような姿勢で受講生と付き合って頂ければよいのであります。

何はともあれ、このＲＹＬＡのカウンセラーシステムは、今井先生独自の発想であり、このＲＹＬＡの伝統の一角にあるものと考えられるのであります。

最後に、伝統というものは、伝統の上に更に新たなる伝統を創造して行くものである、ということについて一つの物語を紹介しておきます。これは、中世イギリスの法学界の**伝統**が築き上げられた物語であります。

１４世紀初頭のイギリス法に"Fleeta"（フリータ）という本がありました。この"Fleeta"というのは、ラテン語でありまして、これを英語に訳すと、Fleet man であります。そして Fleet というのは或る監獄の名称でありますから、"Fleeta"というのは謂わば**「Fleet 監獄の或る囚人」**という意味であります。

実は、１４世紀に或る政治犯に就いての嫌疑を受けて有罪の判決うけた国王の裁判所の裁判官が居ました。その名前は全く判りません。囚人のことでもあり、また、古い時代のことでもあり、しかも当時はその人に対する反感が強かったので、その人のこの世における実名は今日に到るまで伝わっていないのであります。この裁判官は、政治犯として起訴されて裁判所の判決は死刑でありました。何か誤判事件でもやったのかも知れません。

ところで、イギリス法における裁判官は、日本と違って地位が非常に高いのであります。世俗的な階層秩序によれば、神様の次が裁判官、裁判官の次が国王、詰まり国王の良心を握っているのが裁判官であるという考え方でありますから、裁判官になったということは、如何に立身出世の世界で自分が登りつめたかということを意味するのであります。

そこで、その裁判官は、自分は何時死刑を執行されるかも判らない。しかし、今日、自分は法律家として生きている。自分は裁判官になろうと思い定めて一生懸命に勉強した。そして、遂に登り詰めて、国王の裁判所の裁判官にまでなった。そのことがきっかけとなって、結局死刑の判決を受けた。そして、地獄へ堕ちる。

その最後の日が来る前に、自分が今までに蓄えてきたイギリス法の**原理の全体系**を書き留めてからあの世へ行きたいというので、彼は願い出まして、イギリス法の原理の体系を書き出したのであります。恐らく監獄の管理者がその気持ちに同情したのであろうと思われます。そして、その全てを書き終えて死刑が執行されたのであります。

そして、その記録が現在残されていまして、誰が書いたのか判らないのでありますが、"Fleet"監獄の中で書かれたイギリス法の体系的な解説書でありますから、この本のことを"Fleeta" と呼んでいるのであります。

兎に角、誰が書いたのかは判らないが、或る裁判官が死刑執行される前に書き

上げた中世イギリス法の集大成なのであります。これは真に素晴らしいものでありまして、"Fleeta" は、その後、今日に到るまで、どの偉大な裁判官が書いたものよりも権威のある法理論の解説書として扱われるようになったのであります。

ところで、その後**１９世紀**になってから、もう一つの発見がありました。それは、**１３世紀の中頃**に Blackton（ブラックトン）というエクゼターの修道院の院長が居ましたが、が、この人は、国王の裁判所の裁判官をした人でありまして、**【イギリス王国における法律と慣習について】**という素晴らしい本を書いています。

ところが、１９世紀になって、**１３世紀**に書かれたこの本が中世イギリスの Common Law（国王の裁判所が創り上げたイギリス法の体系 cf.Equity）の最も純度の高い集大成であると謂うことが判ったのでありますが、実は、この**１４世紀**に書かれた"Fleeta" の**８０％**が**１３世紀**に書かれた Blackton の本の表現と全く同じだということが判りました。Blackton は１３世紀、"Fleeta"は**１４世紀**であります。したがって、これは**約５０年余り後**に書かれたものであります。

このことを一体どのように考えたらよいのか。

"Fleet"監獄における裁判官は、監獄の中で書いたのでありますから傍には本も参考資料も何もないところで、自分の頭の中にピシッと入っていた法理論を将（まさ）に怨念の如く書き綴って行ったのであります。そして、書き終わって死刑が執行されまして、彼の命は絶たれたけれども本が残り、それを読んだ人達は感動して、これこそ将（まさ）に法のバイブルだと謂って長い年月が経ったのであります。

そして、その後何百年か経った**１９世紀の中頃**になって、"Fleeta" の**８０％**がこの Blackton の本と同じだと判った。即ち、Blackton の方が５０年古いということが判ったとき、"Fleeta"は Blackton の亜流であって人のものを真似たのではないか、とも考えられます。

ところが、イギリスの法学界は、そのような判断を採っていないのであります。"Fleeta"の裁判官は徹底的にこの本を読みこなして、完全に自家薬籠中のものとして、即ち、それが自分の血となり肉となりながら、更にその上に自分のものが**約２０％付け加えられるものがあったこと**によって、彼の本の権威性は些かも侵害されずに、今日、イギリス法学会で認められているのであります。

詰まり、Blackton の中の１３世紀のイギリスの国法の純度の高い解説、それと、"Fleeta"の中の１４世紀のイギリスの国法の純度の高い解説、そこに相違を認めることが出来るのであり、そこに、本当の意味における**独創性・創造**を見ることが出来るのであります。言い方を換えれば、１３世紀の **Blackton を徹底的に読みこなした"Fleeta"の体験の上に更に２０％の"Fleeta"独自の理論が付け加わったこと**によって、新しい理論が創造されたのでありまして、このようにして**伝統**というものは、**体験**をもとにして**新たな伝統を創造していく**ものなのであります。したがって、"Fleeta"の解説というのは、悲惨な劇的な出来事ではありましたが、

それは、人間が昔からの保守・伝統に学ぶべきことを教えているのであります。先人のものを完全にマスターしなくては、創造も何もありません。すると、それは真似ではないか、というかも知れません。しかし、そうではありません。自分の心と保守の心とを一体にしても、"Fleeta"は Blackton より約半世紀新しい時代に生きていますから、その同じにすることが新しい時代における創造になり得るのであります。

この"Fleeta"の考え方は、私達がＲＹＬＡの伝統を守り、**新しい時代に即応したＲＹＬＡの伝統を築き上げていく**上で肝に銘ずべきことであろうと思うのであります。したがって、私達は、**謙虚に頭(こうべ)を垂れて**先人の道に学ぶところがなければならない、という結論になるのであります。

最後に一言。現代社会は、諸々の技術開発によって日々に新たに進歩し、時代は変遷していきます。したがって、時流に遅れないためにもＲＹＬＡも変わらなければなりません。しかし、ここで大事なことは、世の中の変化に連れて変わらなければならないものと、如何なる時代にも変わってはならないものがあるということであります。言葉を換えれば、目に見える現象的なものは日々に新たに変化しても、物事の本質的なものは変わってはならないということであります。

では、このＲＹＬＡの本質にあるものは何か。それは、受講生達の**自律の精神**であり、**今井先生の基本構想**であり、そして、**世界的な視野と歴史的な視野をもつ健全な心の青少年リーダーを育てること**であります。これがこのＲＹＬＡの本質にあるものであります。この話の冒頭に引用しました高浜虚子の俳句、

去年今年貫く棒の如きもの　　虚子

この**「棒の如きもの」**が将(まさ)にこの**ＲＹＬＡの本質にあるもの**なのであります。御静聴有り難うございました。

以上